

ダ・ヴィンチ封印《タヴォラ・ドーリア》の五〇〇年 目次

序 壁画か板絵か？

——ローマから世界に発信された暗号

- 1 日本に伝わらなかった歴史的發展 2
- 2 《モナ・リザ》はダ・ヴィンチの代表作ではない！ 6
- 3 彷徨える《タヴォラ・ドーリア》 9
- 4 《タヴォラ・ドーリア》とダ・ヴィンチ学者の自己矛盾 13
- 5 「ダ・ヴィンチ・コード」と「壁画発見プロジェクト」 17
- 6 「歴史的项目」の、あつけない終わりと密かな始まり 20

第一章 《アンギアーリの戦い》と『君主論』

——ダ・ヴィンチとマキアヴェッリ

- 1 《アンギアーリの戦い》と『君主論』 24
- 2 フィレンツェ共和国 27
- 3 サヴォナローラと国会議事堂 30
- 4 壁画制作の目的 33
- 5 ダ・ヴィンチとマキアヴェッリ、そしてチエーザレ・ボルジア 34
- 6 マキアヴェッリと共和国政府 39
- 7 チエーザレ・ボルジアの夢 46
- 8 理想国家建設と夢の跡 51

第Ⅱ章 壁画と板絵

——壁画制作中断の背景

- 1 一五〇三年、マキアヴェツリとダ・ヴィンチ 58
- 2 一五〇四年五月四日、マキアヴェツリの契約書 64
- 3 一五〇五年六月六日、『マドリッド手稿』第二卷の冒頭 74
- 4 一五〇五年一二月、壁画制作中断の理由 77
- 5 《タヴォラ・ドーリア》と《モナ・リザ》 83
- 6 ミケランジェロとダ・ヴィンチ 88

第Ⅲ章 アンギアーリの戦い

——一枚の板絵に仕掛けたダ・ヴィンチの予言

- 1 「プレフィギュラティオーネン」(Präfigurationen) 94
- 2 史実「アンギアーリの戦い」 95
- 3 《アンギアーリの戦い》とチエーザレ・ボルジア 101
- 4 チエーザレと世界帝国 104
- 5 《アンギアーリの戦い》が予言する近代 111
- 6 《アンギアーリの戦い》が予言する現代 115
- 7 《アンギアーリの戦い》の非戦論 119

第IV章 《タヴォラ・ドーリア》

——画面に仕掛けたダ・ヴィンチのトリック

- 1 《タヴォラ・ドーリア》の物理的データ 124
- 2 四人の騎士と主役逆転の謎 130
- 3 地上で戦う兵士の謎 135
- 4 ヴァザリーの誤解と真実 138
- 5 科学的調査と真作認定、ピール教授のアプローチ 145
- 6 隠された「髑髏」(メモント・モリ) 152
- 7 ニッコロのデッサンと美術史家の限界 155
- 8 オルシーニの右手 160
- 9 ザッキアの銅版画とルーベンス 163

第V章 《タヴォラ・ドーリア》の戦い①

——フィレンツェの捕囚時代とドーリア家の家宝時代

- 1 フィレンツェの捕囚時代——一五二二〜一六二二(一七)年 168
- 2 ドーリア家の時代の始まり——一五二二(一七) 174
- 3 メデイチ家最大のスキヤンダル——一六〇九〜二一年(一七) 176
- 4 ナポレオンの国宝認定——一八〇〇年、フランス領ジェノヴァ 180
- 5 ナポレオンとムッソリーニ——一八一五〜一九三九年 183
- 6 ムッソリーニとニコデーミ博士の政治的贋作認定——一九三九年、ミラノ 189

- 7 ニコデーミ博士の遺言——戦前と戦後 194
 8 陰謀のはじまり——一九三四年、ドイツ・ボン 198

第VI章 《タヴォラ・ドーリア》の戦い②

- スイス、ドイツ、アメリカとドイツ亡命時代
- 1 第一次スイス時代の疑惑——一九四一～五八年 204
 2 《タヴォラ・ドーリア》の亡命説——一九四二～四五年 212
 3 第一次ミュンヘン時代——一九五八～七二年 215
 4 ペドレッティ博士の鑑定書——一九七一年一月四日 223
 5 ハマー氏の売買交渉とニューヨーク時代——一九七二～八六年 226
 6 ハマー財団の壁画調査——一九七四～七七年 232
 7 ホフマン氏とバンザ銀行の破綻——一九七一～七八年 235
 8 《タヴォラ・ドーリア》突然の売買——一九七八～八七年 239
 9 ニューヨークとミュンヘンの戦い——一九七二～八七年 246
 10 第二次ミュンヘン時代——一九八七～九二年 250

註〔序章～第VI章〕 255

《タヴォラ・ドーリア》年表 305

ダ・ヴィンチ封印《タヴェオラ・ドーリア》の五〇〇年

序 章

壁画か板絵か？

ローマから世界に発信された暗号

荒野に呼ばれる者の声がす。『主の道を備えよ、その道をまっすぐにせよ』と言われたのは、この人のことである。

(マタイ伝 3章 1～3節)

2012・11・27

1 日本に伝わらなかった歴史的発表

二〇一二年一月二七日、イタリア政府は、一枚の板絵《タヴォラ・ドーリア》(Tavola Doria)が日本の東京富士美術館から寄贈された、とローマで発表した。

この発表と同時に大統領官邸クイリナーレ宮で、「タヴォラ・ドーリア——大傑作、母国に帰る」と題する特別内覧会が行われ、ナポリターノ大統領、イタリア文化政策の重鎮、オルナギ文化大臣、チェッキ副大臣らが揃って出席した【図序1】。またイタリア政府と東京富士美術館との間で長期にわたる友好協定が締結されたことも発表された。この板絵《タヴォラ・ドーリア》は、一九〇年に筆者がミュンヘンで契約し購入した後、一九九二年六月八日に日本に輸入した絵画作品である。

《タヴォラ・ドーリア》^①(ドーリア家の板絵)という名称は、一九六〇年代後半、レオナルド・ダ・ヴィンチ学者のカルロ・ペドレッティ博士(Dr. Carlo Pedretti)が名づけた俗称である。

イタリア語 *tavola* (タヴォラ) はフランス語の *tableau* (タブロー) と同じ「板絵」という意味で、ラテン語の *tabella* (タベーラ) が語源である。この俗称の由来は、一七世紀初めから約三二〇年にわたって、ジェノヴァ出自の貴族ドーリア家に代々所蔵されてきたことによる。一六世紀以降の文献では《グロッポ・デイ・カヴァッリ》(*gruppo di cavalli* 騎士達の混戦)、あるいは《グルッポ・



図序-1 2012年11月27日、イタリア大統領官邸クイリナーレ宮で公開された《タヴォラ・ドーリア》。左から二人目がナポリターノ大統領。

デイ・カヴァッリ》(gruppo di cavalli 騎士の群像)と称されてきた。また絵の内容をそのまま伝える《軍旗を巡る戦闘》(La lotta per lo Stendardo ラ・ロットタ・ペル・ロ・ステンダルド、英語で「The Fight for the Standard」とも呼ばれている)。

板絵は、画面左に走り去ろうとする二人の騎士と、右手から彼らを追う二人の騎士が中央の「軍旗」を巡って絡み合い激突する緊迫した一瞬のシーンで、その下方に配置された三人の歩兵を絡めながらドラマティックに表現されている。近年の議論から、レオナルド・ダ・ヴィンチ (Leonardo da Vinci 1452-1519) の真作だと認められつつある絵画だが、公式には長い間、「所在不明」とされてきた、いわば幻の名画だと言っている。

イタリアでの報道は、「レオナルド・ダ・ヴィンチの《タヴォラ・ドーリア》が帰国し、水曜日から大統領官邸で展覧会」と、はっきりダ・ヴィンチの真作と伝えているものが多いが、その一方で、「作品は一六世紀の模写である」とした見解も出されている。また「日本人が寄贈した作品は違法輸出されたものであり、カラビニエーリ(イタリア国家治安警察)の活動の賜物だ」とイタリア政府を賛美する報道も見られる。それ

らに加えて、「ブルネイ国王やビル・ゲイツに一億二千万ユーロ（二〇一三年五月のレートで一五八億円以上）で購入を打診された作品」との報道もあり、様々な情報が飛び交っている。²⁾

いずれにせよ、「たった一枚の板絵」がイタリア政府と文化省を動かしたことだけは確かだと言える。たとえ市場の価格で百数十億円を超える「ピカソ」や「ゴッホ」が寄付されたとしても、このように一国の大統領が礼を尽くして受け入れることは考えられない。寄贈された美術品の市場価値つまり金額の問題ではなく、その理由はもっと別なところにある。

ローマから世界に向けた今回の発表の裏に隠された本当の意味。それは、イタリア政府として、《タヴォラ・ドーリア》を「長い間、探し求めてきたダ・ヴィンチの代表作そのものである」と見なし、今後長期にわたって研究し、順次世界に向けてその成果を発表していく「プロセス」に入っただけというメッセージだ。世界の美術史上で重大な意味を持つ「ダ・ヴィンチ作品としての認定」にとどまらず、「ダ・ヴィンチの代表作としての確認」という最終目標に向けて一大事業がスタートしたということだ。

二〇一三年八月現在の段階では、《タヴォラ・ドーリア》が「レオナルド・ダ・ヴィンチの真作かどうか」という誰もが知りたい基本的な情報について、イタリア政府はまだ何も発言していない。だが、寄贈の発表と同時に公表された日本の寄贈主との友好協定³⁾から、今回の寄贈がイタリア政府にとって、いかに重要なものだったかを理解することができる。

その内容とは、《タヴォラ・ドーリア》寄贈の見返りとして今後二十数年間、イタリアの国宝級美術品を無償で貸し出すと一部で報道されている事実に他ならない。もし仮に、イタリアの一部の



図序-2 日本テレビ系列『失われたダ・ヴィンチのフレスコ画発見』ではレオナルド・ダ・ヴィンチの代表作が発見されればツタンカーメン以来と報道された。

マスコミが伝えるように「違法」の疑いのあるものであれば、「戻して当然」の対応で済む。美術品の無償貸し出しをイタリア側が提案し、発表前に合意されているのだとしたら、極めて異例と言ふべきだろう。通常、イタリアの国宝級の美術品の海外への貸し出しは、一回だけでも数十億円規模のギランティが必要とされるからだ。

二〇〇七年、東京国立博物館で開催された特別展「レオナルド・ダ・ヴィンチ——天才の実像」で《受胎告知》（フィレンツェ、ウフィツィ美術館蔵）がイタリアから貸し出されたが、その時支払われたギランティは経済効果から言って一〇〇億円程度であったと推測される^④。もし同レベルの美術品の無償貸し出しが今後、長期間にわたって実行されるのであれば、この友好協定はそれ自体、数百億から数千億円の価値に匹敵することになる。

今の段階で日本に無償貸し出される美術品が何なのか決まったわけではなく、この友好協定が意味する実際の価値はまだ算出できない^⑤。しかし、この友好協定に定められた別の意味とは、イタリア文化省がこの「板絵」を少なくとも数百億円の価値があると自ら認めたことだ。すなわち、イタリア政府が《タヴォラ・ドーリア》をレオナルド・

秋山 敏郎（あきやま としろう）

1958年、門司市生まれ。福岡県立門司高校を経て1978年、上智大学文学部哲学科に入学し、K. リーゼンフーバー博士（哲学）、篠田雄次郎博士（美術史）に師事。卒業後1983年、旭通信社（現ADK）入社、国際本部勤務後1989年、退社。西ドイツへ語学留学後、同年9月、ケルン大学経済学部にて正規入学、東ドイツのマーケティングを学ぶもベルリンの壁崩壊で1990年、ミュンヘン大学美術史学科へ編入。この間、ミュンヘンで会社（敏インターナショナル、現トシインターナショナル）設立。美術館専門の商社として出発し現在に至る。1991年よりドイツのオークション会社「レンベルツ」、1992年より国営オークション会社「ドロテウム」社、時計専門「アンティコルム」社等を中心に、約20社の日本代理店として海外オークションを紹介してきた（2010年頃まで）。

ダ・ヴィンチ封印《タヴォラ・ドーリア》の五〇〇年

2013年9月16日 初版第1刷印刷

2013年9月20日 初版第1刷発行

著 者 秋山敏郎

発行者 森下紀夫

発行所 論創社

東京都千代田区神田神保町 2-23 北井ビル

tel. 03 (3264) 5254 fax. 03 (3264) 5232 web. <http://www.ronso.co.jp/>

振替口座 00160-1-155266

装幀／宗利淳一

印刷・製本／中央精版印刷 組版／フレックスアート

ISBN978-4-8460-1262-5 ©2013 Akiyama Toshiro, printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。